



NEW CROWNの歩み、 そして目指すもの

高橋 貞雄 Takahashi Sadao (玉川大学)

「不易流行」ということばがあります。NEW CROWN (以下 NC) の歩みを振り返るときに、まさにこのことばが妙を得て当てはまると思います。NC は昭和 53 年度版から改訂を重ねて現在に至っています。数多くの先生方、生徒たちの共感・賛同を得て今日があります。

「不易」の部分でいえば、題材の NC と呼ばれるほどに教科書で取り上げるコンテンツを大事にしてきました。NC には 3 本柱というものがあります。それは、「異文化理解教育」「ことばの教育」「人間教育」です。異文化理解教育とは、一言でいえば、英語教育を通して視野を広げる、世界観を豊かにする、ということです。自分たちと異なる世界を見せる、という点で最たるものはアフリカの扱いです。英語の教科書で最初にアフリカを取り上げたのは NC です。今でこそ非英語圏を扱うことは当たり前のことになりましたが、そのルーツは NC です。また NC はアドホックに世界の地域を扱うことをしていません。アメリカという国、そしてその文化を真に理解するためにはアフリカとの関連付けが必要である、という理念が根底にあります。以来、NC は様々な地域・文化を取り上げていますが、必ず英語との関連、日本との関連を取り入れるようにしています。

英語教育は英語を教えることが第一義ですが、言語教育としての責任もあります。グローバル教育という観点でも言語は重要な要素です。ことばには社会性、関係性、伝達性、表現性、認知性など多様な側面があります。NC はこれまで、ケニアやインドにおける複数言語使用を題材にして、母語の重要性や言語使用の実態を話題にしてきました。日英語比較、少数派言語、スピーチなどもことばの教育の一環です。NC が文法の体系性を重視してきたのもメ

タ言語教育としてのことばの教育を重視していることの反映です。現在、学ぶ力の育成に焦点が当てられています。学習計画の立案や学習の振り返りも結局のところはことばの教育の具現化です。

異文化教育もことばの教育も人間教育の 1 つです。加えて NC が重視しているのが、環境教育、平和教育、共生教育といった、いわば徳育に関わる分野です。広島を基礎にした平和教育、キング牧師を代表にする人物伝などはずっと大切にしてきましたし、伝統文化や自然科学も重視して扱ってきました。

また、ここでの「流行」とは、時代のニーズに応える、ということです。1980 年代にはコミュニケーション・アプローチが導入され、言語活動重視という流れを生み出しました。つまり、知識の習得だけでなく活用を通してコミュニケーション能力の育成を図るという英語教育観への移行です。時代のニーズに応えるべく、NC は Show & Tell に基づいた表現活動を積極的に導入したり、それまでには見られなかった 4 技能の活動を特化した「Let's シリーズ」を打ち出し、大きな評価を得ました。それを現在では、教科書構成上も、GET と USE へと発展させています。こうした取り組みは言語習得理論の知見と学習指導要領の要請を加味して生まれたものです。

現在は、活動の中で言語に関心を寄せるべきだという Focus on Form の指導法や言語とコンテンツを関連させる CLIL が注目されています。こうした指導法は、NC が従来から取り組んできた指導理念と同一軌道にあるものです。今後の教科書は題材か活動かという二肢選択ではなく、題材も活動も重視していくべきだと思います。そうすることで生徒たちの学習動機が高まり、結局はコミュニケーション能力が高まると思うからです。